

もったいない運送で 「新たな公」を作る

有限会社鹿毛運輸 代表取締役 鹿毛哲也

■もったいない運送の公共性について

私は、もったいない運送を当初から推進してきたが、これは本当に新しい公（新しい公共）の仕組みになり得ると確信している。

福岡県朝倉市では、類にもれず人口減少や高齢化、過疎化により公共交通や物資配送の非効率化などが顕著になっている。一方、ガソリンの高騰により運送コスト増を利用者に負担してもらわなくなっている結果、ますます、地域でのヒト、モノの移動・交換は減少し、特に高齢者は不便さを我慢しながらの生活を強いられている。病院に行く、買い物にでかける、というのは生活にどうしても必要な部分で、それを支えるヒト、モノの移動・交換は公共交通として提供されてきたが、今、地域交通という公共的なニーズの需給関係が崩れていると言える。

公共的なニーズは時代の流れとともに常に優先順位が変動し、例えば、環境問題の公共性は高まっており、環境への予算配分は大きくなっている。植林を市町村がやる場合に政府は半分を支給するという具合だ。では、環境の優先順位が高まる中



雪の中で積んできたホイールを

受け取り運び受け入れ備えスタッフ

で、「もったいない」という言葉が世界の合言葉になっても、もったいないをなくすための間接予算を行政が提供できるかという点、それはなかなか難しいのが現状だ。社会が複雑化し、ニーズが多様化

する中で、必要だが行政では取り組めない分野が増えている。さらに、行政ではいろんな法律や従来からのしがらみで、なかなかすぐ対応できない現実もあるし、財政策の行政の経営する地域交通は財政的にも持続が難しいと考えられる。そこで行政に代わって、民間のオンデマンドバスなどが各地で始まってきているのは周知の通りである。それでもカバーできないモノの部分を民間の運送業者が地域と手をつないでできないものか、というのが私の挑戦だ。それには地域にある財を持ち寄る必要がある。運送をボランティアで手伝う人、利用していない車を提供する事業者、そして、効率的で誰もが使える公共のシステム作りだ。



■もったいない運送で地域の問題を解決

運送分野で「もったいない」を実現しようとするのが「もったいない運送」で、ある団体では不要なものが、別の団体では必要とされているのに、その運搬費用を工面できずに廃棄しているような事例が地域内ではたくさんある。例えば、規格外や生産調整で出荷できない農作物は地産地消を推進する高齢者給食ボランティアにはとても必要とされるのに、それを受け取りに行く手段や費用が出せないでいるとか、公共の教育施設が定期的に交換する役を、他のNPO団体が活かせるはずなのに、運ぶためのトラックをリース出来ない、といった具合だ。

そこで私は、平日は本業の運送業で使っているトラックを、土日には無償提供し、社員研修の一環として、九州地域、山口県、島根県のNPO同士のもったいないモノの交換のお手伝いをしてきた。費用は前の地点から自分の拠点までのガソリン代にしたところ、なるべく短く回るルートを自